

ある。このような兵器体系を「島嶼防衛用」と称して、南西諸島などに配備することは、緊張をさらに激化させ、中国との不毛の軍拡競争に繋がることは間違いない。日本と中国の軍拡競争は、周辺諸国への軍拡の連鎖を生み出し、アジアから中東に及ぶ広大な地域の緊張をさらに高めることにもなるう。

私が館長を務める明治大学平和教育登戸研究所資料館でも11月22日から来年5月末まで企画展「日本が戦争になったとき―軍拡の時代と秘密戦―」を開催し、軍拡⇨戦争準備が社会をどのように変えてしまうのか、考える材料を提供する予定である。

【出典・参考文献】

- 堀越二郎・奥宮正武『零戦』（朝日ソノラマ文庫、1982年）
 山田朗『軍備拡張の近代史』（吉川弘文館、1997年）
 山田朗『世界史の中の日露戦争』（吉川弘文館、2009年）
 山田朗『近代日本軍勢力の研究』（校倉書房、2015年）
 南塚信吾・油井大三郎・木畑洋一・山田朗『軍勢力で平和は守れるのか―歴史から考える』（岩波書店、2023年）
 （やまだ・あきら／明治大学平和教育登戸研究所資料館長）

無言館に所蔵された父の絵

藤川 征輝

私は昭和二十年一月十日に香川県観音寺で生まれました。父の実家がある疎開先です。私の父はその時は満州に出征しており、翌年の昭和二十年十一月十六日戦病死しました。正確な死に場所も確定できないところで戦病死しました。三十八歳の若さでした。

父は東京美術学校（現・東京芸術大学）日本画科卒業後、母と結婚し講談社の挿絵や雑誌の出版などで活躍したようです。

私は生まれた時から父がいないので片親だった事をそう不自然には思いませんでしたが、まわりからはいろいろと同情されました。

私がイヤだったのは兄弟が女性ばかり。姉が三人いて男は末子の自分一人だったことです。上からのおさがりがすべて女性もので赤いカサで小学校へ行くといじめっこのから、オンナ、オンナと冷やかされました。

そんな訳で父からももらったものといえは、父が出征前に言い残した、子供が男の子だったら征輝に、女の子だったら征子にとの名前ぐらいですが、この名前もいまだ

に好きになれません。父との関係が家族で深かったのは母に次いで長女ですが、十三歳で終戦を迎え父を亡くしています。戦後この長女と母とで家族を支えてくれました。長女として戦後、父の話があまり出ないのをさびしく思っていたのでしよう。どこからか聞いてきた無言館に、父の絵を展示してもらおうと手続きましたようです。

私は正直言ってもあまり関心がなかったのですが姉に誘われて無言館のセレモニーに参加しました。そう言う私も多少は父の血を引いているのでしようか、武蔵野美術大学を卒業してその後、美術にかかわって居ります。無言館の縁を作ってくれた長女もちようど十年前に他界しました。

チャンスがあれば家族と無言館へ行き再び父の絵を改めてじっくり見たいと思っています。（ふじかわ・ゆきてる）

*編集部・藤川征輝様の父・藤川武男氏の絵「無題」は本誌198号表紙として掲載いたしました。藤川征輝様から198号の表紙絵の問い合わせがあったことから、藤川様にご寄稿をお願いいたしました。